

ジャック・アタリ著「金融危機後の世界」作品社 2009年9月10日刊を読む

金融危機後の世界

1. しかし、何も解決されていない—オバマ大統領、ガイトナー米財務長官、そしてG20—
 - (1) しかしながら何も解決されていない。危機ははじまったばかりで、最悪のシナリオも想定しうる。
 - (2) 不況は足もとにまで押し寄せている。借金返済は加速している。デフレの脅威が高まってきた。今後危機に対して抜本的な対策を講じなければ、企業、消費者、労働者、預金者、債務者、都市、国家は、根源的な打撃を受けるであろう。
 - (3) 銀行は自己資本比率がジリジリと下落するのを目の当りにし、自らの将来に脅えている。すると銀行は健全な企業に対しても貸し渋ることになる。この煽りを受け、企業は倒産に陥る。銀行自身も債務削減を余儀なくされるが、これを怠れば国有化されてしまう。これまでアメリカの月末の資金繰りを支えてきた中国は、自らの預金を次第に自国に引き戻すであろう。こうして、アメリカは、自らの債務をファイナンスしてくれる相手を見つけないことになっていく。
 - (4) アメリカに残された手段とは、「債務モラトリアム(法令を出して債務の返済を一定期間猶予すること)宣言」を打ち出すか、インフレを起こしてしまうかである。どちらの手段も資産を持つ者すべてを破滅させ、すでにアメリカの対外債務の増大により信用が失われつつあるドル相場を崩壊させてしまうであろう。
 - (5) 西側主要国の債務が解消されるまでの期間、少なくとも2年、あるいは5年、長ければ10年にわたって、不況に見舞われるであろう。この不況は大幅な物価下落を招くであろう。たとえ政府の大規模な財政出動があろうとも、景気を本格的に再起動させることは難しいと思われる。
 - (6) そしてこの金融危機は、やがて経済危機となり、さらに大きな社会的政治危機をも招いていくことになる。すなわち、数億人の人々が職業の危機にさらされる。また、政治体制も金融市場というゴーレム(ユダヤの伝説に登場する生命を与えられた泥人形。作った主人の命令だけを忠実に実行するが、あやつるには厳格な決まりが数多くあり、それを守らないと狂暴化し、人間に被害を与える)を創り出すことに加担したのにもかかわらず、これをきちんと制御することができない無能力ぶりを批判され、いずれ信任を失うであろう。その先にわれわれを待ち受けているのは、暴力であり、インフレである。われわれの世界には、個人主義や不誠実さだけがはびこるようになり、社会の公正性への信頼が失われ、ついには民主主義さえも危ういものになるだろう。

2 . 21世紀の大惨事(カタストロフ)は避けられるか

- (1)こうした大惨事を避けたいのであれば、諸悪の根源が「市場」と「法整備」との不均衡にあることを認識すべきである。この不均衡こそが、需要を減らし、需要を借金に変え、合法を非合法すれすれか、さもなければ非合法、さらには犯罪行為そのものによって、丸々とした金融利得者を生み出してきたのである。
- (2)今、世界を襲っている危機は、無秩序なグローバル化が、世界を経済的・社会的・環境的な危機に陥れていることに対する最終的な警告と受け留めるべきであり、これを見直す最後のチャンスとなるかも知れない。

3 . 危機から脱出するための必要な措置

- (1)今こそ、われわれはこの危機を大惨事(カタストロフ)へと発展させないための人的・金融的手段や、テクノロジーがあることを認識し、抜本的な改革を押し進めていくべきである。

- (2)この危機から脱出するためには、最低限、次の措置が必要であろう。

カジノ金融に終止符を打つための方策として、経済や金融に関する情報を、すべての人に公平かつ同時に公開し、そして誰にとっても利用可能にすること。

金融市場は、そもそもグローバルなものである。この国際金融市場と、世界的な法整備とのバランスをとること。

これは、銀行家は絶対に嫌がるであろうが、銀行家という職業を謙虚で退屈な仕事に舞い戻らせること。

金融的なリスクや流動性の問題を、世界規模できちんと管理すること。

報酬制度を見直し、証券業務と銀行業務を分離し、他人に自らのリスクを負わせる人々に対する責任を追求すること。

すでに国によっては国家規模で取り組んでいるが、地球環境の面で持続性のある世界規模の大型公共事業を実施すること。

- (3)しかし、こうした措置がタイミングよく打ち出される可能性は少ないだろう。

- (4)それでも、グローバル経済下での初めての危機と言えるこの世界金融危機が...

必要不可欠な金融機関の国有化

国家の統治権の強化

情報や知識への平等なアクセス

安定した世界の需要の確保

世界規模の最低賃金の設定

国際法の整備

...などに対する意識を芽生えさせていく可能性がある。

(5) そうなれば、1637年の「チューリップバブルの崩壊」という危機がネーデルランド連邦共和国(現在のオランダ)の150年にわたる繁栄の道を切り開いたように、21世紀の世界は、大惨事(カタストロフ)の道を回避していくことができるであろう。

(6) この分岐点は、最大で一世紀にわたるであろう。しかしながら、現在^{さきや}囁かれるようになってきた安易なや楽観論ばかりが幅を利かせていけば、多くの危機や戦争がわれわれを待ち受けている可能性がある。

P34 ~ 39

[コメント]

来日中のジャック・アタリ氏の最新の著作。世界経済危機の真ただ中で、危機を乗り切るためにこれからの世界をリードしていくと思われるリーダーの考えがよく分かる。安易な規制強化、国有化は全体主義、世界大戦への道を歩むことを十分知りながらの論述には説得力がある。どうジャック・アタリ氏の論述と真正面から向き合うか。世界の、日本の、また、各々の地域の知性が試される。

- 2009年9月29日 林明夫記 -